

やるべきことを見つけた
JICAとの出会い

ウズベキスタンの首都タシケントにあるJICAウズベキスタン事務所。シャリフの愛称で同僚から親しまれているナショナルスタッフのシャリフゾーダ・シャリポフさんは、プロジェクト実施に必要な情報のリサーチや分析に日々追われている。しかし、一時も気を緩めることなく、一つ一つ丁寧にこなしていく。そんな彼の原動力となっているのは、9年にわたって担当する法整備支援に対する熱い想いだ。ウズベキスタンは、旧ソ連崩壊後の1991年に独立。市場経済体制へと緩やかに移行を進めてきたが、民間の企業活動に必要な法律が適切に運用されていなかった。そこでJICAは、同国の経済発展の促進を目指し、行政手続法や倒産法など企業活動にかかわる法律を中心に支援している。

しかしロシア語やウズベク語でのコミュニケーションなど、日本人にとってはウズベキスタンならではの苦労も多い。でもそんな時、シャリフさんはこう声をかける。「乗り越えられない壁はありませんよ」。JICAウズベキスタン事務所の二瓶直樹職員は、「そんな彼の前向きな言葉にこれまで何度励まされ、刺激を受けてきたか」と話す。常に冷静沈着。しかし二瓶さんいわく、「仕事への情熱は誰にも負けない」というシャリフさん。大学時代に国際

関係学を学び、卒業後は海外報道ラジオ局での記者、旧ソ連諸国の市場経済移行などをTACIS※で支援するなど、自らの夢でもあった、国際的な仕事に携わってきた。そんなシャリフさんに転機が訪れたのは今から9年前、JICAの求人広告を目にした時。「ウズベキスタンの発展には、開発を支援する諸外国の存在は欠かせません。国の発展に貢献したい」と思っていた私にとって、ぴったりな仕事だと思いました。」

法整備支援への
熱い想いを胸に

念願叶って2002年にJICAウズベキスタン事務所に就職。これまで教育分野の支援などにも携わってきたが、今、彼が最も関心を寄せるのが法整備支援だ。「法律は、食料や教育といった最低限必要なニーズと同じくらい重要なもの。人や企業に、権利を与え、重要なことで、人々の社会生活を守り、企業活動を促進する力があります。実務に携わっていく中で、自分にもより実践的な法律の知識が必要だと感じ、JICAで働きながら大学に通い、法律の学位を取得した。」

これまで特に印象的だった仕事のひとつが、05年からの「倒産法注釈書作成プロジェクト」だ。独立後、国営企業の民営化に伴って倒産法が制定されたが、「施行後間もないことや参考文献がないために定着せず、倒産処理の手続

JICAウズベキスタン事務所 プログラムオフィサー
Sharifzoda Sharipov

シャリフゾーダ・シャリポフさん



JICAウズベキスタン事務所のメンバーと打ち合わせに臨むシャリフさん(左から2人目)と二瓶さん(左端)。全員が「ファミリー」の一員として、一致団結して仕事に取り組んでいる

きが統一されていなかった」という。そこでJICAは、最高経済裁判所が発行を計画していた倒産法の「注釈書」の作成と、裁判官や企業家などへの普及を支援することになった。日本とウズベキスタンの専門家が協議しながら原稿を作成。当初はロシア語版の出版しか予定になかったが、「地方も含め、多くの人に倒産法を知ってもらうためにはウズベク語版が必要」というシャリフさんの強い後押しにより、ウズベク語版の出版が決定した。当時、共にこのプロジェクトに携わった元JICA専門家の松嶋希会弁護士



ホラズム地方経済裁判所で、ウズベク語版の倒産法注釈書を手取る職員たち。フローチャートなどを使って分かりやすく説明した注釈書は、ウズベキスタンでは画期的だった

は、「肺炎で入院した時も、彼は病床で編集作業を続けていました。その熱意は並大抵ではなかった」と語る。最終的に、ウズベク語、ロシア語、英語、日本語の4言語版を発行。そしてある日、シャリフさんはうれい偶然に出くわした。「バスの中から見かけた学生が手にしていたのは、私たちがプロジェクトでつくったあの注釈書でした。その時は、法律をもっと分かりやすく知りたいという人々の願いに応えることができたのだと感動しました。」

シャリフさんにとって「法律とはエンパワーメント(能力強化)」。彼自身、日々の生活で幾度となく法律に助けられ、その必要性を実感してきた。それ故に、自国の人々に有益となる法整備を成功させたいという思いは強い。そんなシャリフさんを、松嶋さんは「同志」と、二瓶さんは「分身」と呼ぶ。その言葉に象徴されるように、彼はJICAとウズベキスタンの関係者をつなぐ重要なパイプ役。JICAのこともウズベキスタンのこともよく知る彼の存在は大きい。

ウズベキスタンには、法令の矛盾や不透明さが残る行政手続法など、まだ改善が必要な法律がたくさんある。自身の法律の知識と経験を生かし、これからも自国の発展に貢献したい。JICA職員や専門家、カウンターパートとともに、シャリフさんの挑戦は続く。

シャリフゾーダ・シャリポフ
1974年ウズベキスタン・タシケント出身。大学で国際関係学を専攻、96年に卒業後は地元ラジオ局の記者などを経験。2002年から現職。主に法整備分野を担当している。



倒産法の注釈書を普及するセミナーが行われたフェルガナ州経済裁判所前で。シャリフさん(左)と松嶋JICA専門家(左から4番目)もプレゼンテーションを行った



※正式名称はTechnical Aid to the Commonwealth of Independent States。EUの執行機関である欧州委員会が旧ソ連諸国に対し、民主化や市場経済移行を支援する技術協力プログラム。

「ウズベキスタンと日本の架け橋になりたい」

JICAウズベキスタン事務所で働く、シャリフゾーダ・シャリポフさん。自国の法整備に貢献するため、日本とウズベキスタンのパイプ役として奔走している。

第25回
ゲンバの風

